二次読み

> 二、三日、雨が降り続いたその間、ごんは、外へも出られなくて、あなの中にしゃがんでいました。…(1)

構造の上では、「はじまり」の状況説明の部分だ。「外へも出られなくて」「あなの中にしゃがんで」いたし、それも「二、三日」もの間。という状況は、一次読みでもかなり読み取れるのだが、全作品を通して、一回通り読み通すと、その意義付けは重くなっていくことに気づく。

第一に、ここまでに描かれているごんの状況と生活、性格との関連だ。ことがらが構造化される。

①ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっぱいしげった森の中にあなをほって住んでいました。

②夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。

ひとりぼっちの小ぎつねが、とてもさびしい状況であることは理解の上ではわかっても、気持ちの上で共感することは、かなり困難なことだ。だから、一次読みの段階では、②の「いたずらばかりしました」の文とは、相対的に独立してとらえられることになるだろう。つまり、①と②とは、並列の関係になりやすい。しかし、一次読みを終わった段階では、ひとりぼっちで森の中に住んでいるという状況が、いたずらばかりするという行動の原因になっていることがとらえられる。実は、①と②とは、原因・結果という構造をもっているのがわかっているわけだ。

そのことは、たとえば、「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か」と、母親を失って悄然と麦をといでいる兵十に共感できるごんのさびしい生活がうらうちしている。そのさびしいごんが、二日も三日も、あなの中に「しゃがんで」いる気持ちが、この段階では位置づけられる。

第二に、ごんの好奇心の強さ、感情の豊かさがわかっている。

③ 空は、からっと晴れていて、もずの声がキンキンひびいていました。

④ 辺りのすすきのほには、まだ、雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水がどっとましていました。ただのときは、水につかることのない、川べりのすすきや、はぎのかぶが黄色くにごった水に横だおしになって、もまれています。

⑤ 兵十がいなくなると、ごんは、ぴょいと草の中からとび出して、びくのそばへかけつけました。ちょいといたずらがしたくなったのです。

⑥ 「なんだろう。秋祭りかな。祭りなら、たいこやふえの音がしそうなものだ。それに、だいいち、お宮にのぼりがたつはずだが。」

⑦ いいお天気で、遠く向こうには、おしろの屋根がわらが光っています。墓地には、ひがん花が赤いきれのようにさき続いていました。と、村の方から、カーン、カーンとかねが鳴ってきました。

⑧ ごんは、そのいせいのいい声のする方へ走っていきました。と、弥助のおかみさんが、うら戸口から、「いわしをおくれ」と、言いました。

このことについては、例をあげるときりがないほどで、子どもたちにあげさせると、もっと出してくるだろう。「はちまきをした顔の横っちょうに、円いはぎの葉が一枚、大きなほくろみたいにへばりついていました。」などを代表例とする兵十についての描写は、兵十の描写であるばかりではなく、ごんの豊かな感情や観察力をも示していることがわかるから。「ところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、太いうなぎのはらや、きすのはらでした。」などの描写もそうだ。

そのごんが、二日も三日も、外へも出られないのだ。それが、「しゃがんでいる」という内容であることが、この段階で読みとれる。

第三は、第一、第二で示した、落ち着かない、そわそわした気分は、後には解消されるもので、そのことと対比されて、「あなの中でしゃがんでいました。」がとらえられる、ということだ。

⑨ 月のいいばんでした。ごんは、ぶらぶら出かけました。

⑩ 兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。

ひとりぼっちの小ぎつね、という状況を主観的にだが超えることができているごんならば、この雨の中の穴ごもりは、ここに示されたような「しゃがんでいました」というような気分とは、もっとちがったものになっていただろう。

第三の点は、二次読みをすませた後でとらえられる内容のものであるのかもしれない。しかし、一次読みで描き出され、とらえられた「絵ときもち」は、一次読みでは、すじの展開に従って構造化され、位置づけられていくが、それは、

たいそう総合的で有機的な学習だ。だから、二次読みは、いつも全体の関係づけの立場を失うことなく展開される必要がある。

以下にあげる二次読みの対象となる文、場面についても、同様なことが言える。子どもたちは、状況によって、どこをとりあげ、どこへ発展させ、どう関係づけるか、場合によってちがうことがある。

> 兵十がいなくなると、ごんは、ぴょいと草の中からとび出して、びくのそばへかけつけました。ちょいといたずらがしたくなったのです。
>
> (2)

この文は、②に示されているごんの説明によると、ああ、あいかわらずのいたずらぐせが出ているのだなと、受けとられ、見逃されてしまう位置づけになっているかに見える。だが、ここで、「ちょいといたすらがしたくなったのです。」に注目すると、次の点が明らかになる。

第一は、ごんはいたずらをしに「川下の方へとぬかるみ道を歩いて」いったのではない、ということだ。

雨が上がると、ごんは、ほっとして穴からはい出し、ここまでやってくる。彼の目に映り、耳に聞こえるものは、何だって新鮮で感動的だ。ごんは、それを追いながら、「川下の方へと」歩いている。だが、一次読みの段階では、②の説明に拘束される。必ず、子どもたちは、「何かいたずらの種はないかと考えて歩いているのだ」というとらえ方をする。川の中に人がいるのも、そうっと歩きよるのも、兵十の行動に目を注いでいるのも、いたずらぎつねの行動としてしかとらえられなくても不思議ではない。

だが、いたずらの気持ちを出したのは、「兵十がいなくなると」という条件による。兵十がいなくなる前までは、そうではなかったのかもしれないのだ。「ちょといたずらがしたくなったのです。」という文は、たしかに、いたずらもの の発想で、いたずらものでなかったら、続いておこなうようないたずらは、ふつう、できないだろう。だからといって、兵十がいなくなる前までも、いたずらをねらっていたわけではない。それは、そこまでに描かれている文の鮮やかな映像と、わざわざ「いたずらがしたくなったのです。」という記述によって、とらえられるにちがいない。

第二に、いたずらはするが、ごんは、強い好奇心と豊かな感情をもったかわいい子どもとして、ここで、はじめて、はっきり描かれている、ということだ。このときのいたずらは、兵十に追い払われて、うなぎを首に巻きつけたまま、横っ跳びに逃げるのだが、結局、うなぎは、「草の上にのせておきました。」という処理をして終わる。この行為については、次に述べるのだが、いたずらぎつねとしての烙印付け、先入観は、この「のせておきました。」で破られることになる。だが、どの前に、ここでも、その布石がきちんと打たれていることが、この文でとらえられ、位置づけられていることを読みとることができる。

一次読みの段階で、そのことに気づくことがあるかもしれない。しかし、多くの子どもにわかることはないから、一次読みでは、たとえば、

＋β の文で、何か新しいことを見つけた人、いる？」

といったふうに問いかけ、「いたずらがしたくなったのです。」に線をひかせて、文を確認させ、作品全体に形象化されているごんの性格を思い出させたり、いたずらぎつね、というきめつけに反論したりして、この文の位置づけを確かめることができるだろう。

> ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっと外して、あなの外の草の葉の上にのせておきました。（β

一次読みの段階では、（β に気づかないのがふつうで、この（3）も（2）と同様に、「いたずらぎつね」という先入観で読み進めていたはずだ。だが、この文の「あなの外の葉の上にのせておきました」という内容は、その先入観では矛盾してしまい、ふつうなら、「おかしい」「ごんにふさわしくない」「もしかしたら、ごんはいたずらばっかりのきつねではないのかもしれない」「いたずらなのだが、人一倍、やさしさをもっているかもしれない」といった意見になり、ほんとうはどうか、については、保留せざるをえない、ということになる。なかには、（2）も含めて、きちんと位置づけのできる読み手もいるだろうが、それはむしろ、例外というべきだろう。

しかし、一回通り読み進め、全体の読みが終わった段階では、この「草の葉の上にのせておきました」という行動は、ごんの性格として、何も矛盾することのないものになっているに違いない。だから、この文は、「いいね、わかるね。

のせておいて、そでどうしたの。」「この場面は、ごんの性格のどんな側面を描いているの？」といった程度のたしかめですむかもしれない。

　このことについては、次の文の指しししめす内容とともに、ごんの性格の一面（重要な一面）として整理する必要があるだろう。一回通り作品を絵ときもちにおきかえる仕事（一次読み）をすました子どもたちは、ごんがけっして「いたずら小ぎつね」ということばや概念で言い表すことのできない、豊かな人格をもっていることはわかっている。その具体的な行動も位置づけておかなくてはならない。

⑦　いいお天気で、遠くむこうには、おしろの屋根がわらが光っています。・・・・略

⑪　人々が通ったあとには、ひがん花がふみ折られていました。

⑫　いつもは赤いさつまいもみたいな元気のいい顔が、今日は、なんだかしおれています。

⑬　そのばん、ごんは、あなの中で考えました。「・・・ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

⑪　「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」こちらの物置の後ろから見ていたごんは、そう思いました。

　これは、人一倍感受性が豊かであるばかりでなく、ごんの「やさしさ」を示す行動であり、思考である。ごんが、「草の葉の上にのせておきました」という行動をとったことは、一次読みでは意外でも、この段階に来ると、意外でも何でもない。そして、そのやさしさゆえに、「ひきあわないなあ」と思いながらも、次の日も、兵十のために、くりを運んでやり、そして、あの悲劇となったのだ。ごんの兵十に対する気持ちは、単にやさしさだけではないが、やさしさが基本になっていることを、読み手は疑わない。その最初のはっきりした痕跡が、この文にはある。その位置づけは、もう、決して困難ではない。

「・・・・ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」　（4）

　ごんが人一倍感受性豊かで、好奇心が強く、しかも優しい性質だとしても、いたずらぎつねには変わりない。畑へ入って芋を掘り散らしたり、菜種がらの干してあるのに火をつけたり、百姓家の裏手につるしてあるとんがらしをむしりとったり、いろんなことをしてきたのだが、そのとき、「ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」とは思わなかった。そうにちがいない。

　また、「ちょいといたずらがしたくなって」兵十のせっかくとったびくの中の魚を川の中へポンポン放り込んだり、うなぎに首を巻きつかれて、結局、それもとってしまった、というそのときも、ごんは反省したり後悔したりはしなかったらしい。それなのに、どうして、このとき、（4）のように反省し、後悔したのだろうか。そういう問いかけに、子どもたちは応えられるだろうか。

　そのことについて、次の三点をとらえる必要がある。

　第一は、魚やうなぎをとったあと、兵十のおっかあが間なしに死んでしまって、兵十が自分と同じ、「ひとりぼっち」になってしまったという共感があった、ということだ。

　いままでのいたずらのとき、そのいたずらがどんな事態を引き起こしたか、について、おそらくごんは考えたことがなかったのだろう。だが、うなぎをぬすんだとき、わずか十日ばかりのうちに、兵十のおっかあが死んでしまったことを知った。そして、「元気のいい兵十が」「なんだかしおれている」のを目撃してしまう。自分のいたずらと、それがおこした結果について考えざるをえない状況が、この場合あったのだ。

　第二は、その立場で考えてみると、兵十のはりきりあみのときのようすには、何となく、切迫感があったと思い出されてくる。

⑮　兵十は、ぼろぼろの黒い着物をまくしあげて、こしのところまで水にひたりながら、魚をとるはりきりというあみをゆすぶっていました。

⑯　はちまきをした顔の横っちょに、円いはぎの葉が一まい、大きなほくろみたいにへばりついていました。

⑰　兵十はびくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみといっしょにぶちこみました。

⑱　兵十は、それから、びくを持って川から上がり、びくを土手においといて、何をさがしにか、川上の方へかけていきました。

　兵十ははたらきものなのかもしれない。いつも、こんなふうに仕事に熱中しているのかもしれない。そうであっても、ごんがあなの中で考えたことをうらうちするように、やっぱり、兵十の切迫感がこれら⑮～⑱の文には読みとれる。そ

うであるなら、ごんは、勝手に思いこんでしまった、と断定することはできないだろう。

第三は、作家観にかかわることなので、四年生を対象には授業に生かせないかもしれない。

すでに述べたように、このごんぎつねは、南吉がまだ十七歳、中学生の時の作品で、これに先行する童話作品は「帳紅倫」「正坊とクロ」（いずれも「赤い鳥」）ぐらいなのだが、そして、それぞれのモチーフや主題にちがいがある（このあと、「赤い鳥」には、「のら犬」がのせられているので、動物との交流、というモチーフには、共通性があるというべきだろう）のだが、後年、「小説」として発表したものの中に、このことについて書いたものがかなりある。「久助君の話」は、南吉二十六歳の作品で、その後、「久助君」を主人公とした作品がいくつか続いている。「久助君の話」の最後は、「久助君は、こう思うようになった―わたしがよく知っている人間でも、ときには、まるで知らない人間になってしまうことがあるものだと。そして、わたしがよく知っているのが、ほんとうにその人なのか、わたしの知らないのがほんとうのその人なのか、わかったもんじゃないと。そして、これは、久助君にとって、一つの新しい悲しみであった。」となっていて、子どもが少年になる時、突然、いままでの概念が転換され、新しい概念におきかえられるという不安、悲しみがある。そして、それは、成長の必然なのだ、というテーマにつながっている。このテーマは、「川」「嘘」「屁」「貧乏な少年の話」「耳」などの作品や、死の直前の「かぶと虫」「いぼ」にまでつづいている。

ごんが「ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」と、あなの中で考えた、その必然性は、すでに述べた二つのことがらのほかに、作家南吉自身の重要なテーマ、ないしモチーフとしての必然性をもっているように見える。処女作に近いこの作品にも、それをかいま見ることができるように思えてならない。

（5）

「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」

この文は、おっかあを失ってひとりぼっちになってしまった兵十に対するごんの共感を示している。そして、この共感は、すぐ前の場面の「ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった」という後悔と連動している。

兵十については、次のような関係の中に位置づく。

① ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうっと草の深いところへ歩きよって、そこから、じっとのぞいて見ました。「兵十だな。」と、ごんは思いました。

⑮～⑱ 兵十はぼろぼろの・・・・ 何をさがしにか、川上のほうへかけていきました。

⑳ そのとたんに、兵十が、向こうから、「うわあ、ぬすとぎつねめ。」とどなりたてました。

⑫ いつもは赤いさつまいもみたいな兵十が・・・

21 「ははん、死んだのは兵十のおっかあだ。」ごんは、そう思いながら、顔を引っこめました。

22 兵十はいままで、おっかあと二人きりで、貧しいくらしをしていたもので、おっかあが死んでしまっては、もうひとりぼっちでした。

そして、この共感は急速にふくらんでいく。

23 ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

24 次の日には、ごんは、山でくりをどっさり拾って、それをかかえて、兵十のうちへ行きました。

⑨ 月のいいばんでした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。

⑩ 兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。

「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か」には、ごんが自分自身をひとりぼっちの身の上として、兵十に対する共感を述べているのだが、自分のひとりぼっちについての記述があるわけではない。説明部に、① ②があり、それをうけて、⑤のいたずらがとり上げられているが、自分のひとりぼっちについては、ここではじめて確認している。ごんの孤独感は、読み手のほうで、そのいたずらと、兵十への傾斜の中で読みとられ、形象化されることになっている。ここでは、（4）とともに、兵十に対するごんの共感が、すじをつくっていく最大のモメントであることを確認することができる。兵十がひとりぼっちになったことによって、ごんはそれに対する共感によって、自分の孤独感を確認しているように見える。

月のいいばんでした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。

一次読みの段階で、この「ぶらぶら遊びに」は、必ず取り上げられなくてはならない。そのとき、「ごんらしくない」「おかしい。どうしたんだろう」「変わり方がひどい」などという意見が出たら、必ず、それに対するその段階なりの答えが子どもたちから出されたにちがいない。その位置づけの正確さによって、ここの扱いは異なってくるだろう。しかし、一次読みがかなり正確であっても、それは、見通し的であったはずだから、ここでは、全体への位置づけをおこなっておかなくてはならない点は共通である。

月のいいばんに、さしたる目的もなしに出かける。目的といえば、「遊びに」なのだが、月に浮かれて一つ散歩でも、といったごんの行動は、今までの「いたずらぎつね」とも、緊張感のあるごんの行動ともちがう。しかも、ぶらぶらなのだ。ここでは、まず、今までのごんとはちがったこの行動、その行動によって表現された気持ちがある点を確認しなくてはならない。ごんは、かわったんだな、ということが、子どもたちにわからなくてはならない。

そして、次にこんなふうに変わったことの必然性が共感されなくてはならない。その位置づけは、（5）の延長線上だから、（5）がとらえられていると、さして困難はない。前ページの23　24　⑨　⑩　の文が、その流れだ。

はりきりあみをしている兵十に、ごんは「ちょいといたずらがしてみたく」なって、魚を盗むが、そのあと、兵十のおっかあの葬式を見る。そして、いたずらを後悔し、さらに、麦をといでいる兵十に「ひとりぼっち」どうしの共感を持ち、うなぎのつぐないの、まずひとついいことを手始めに、どんどん、兵十への共感を深めていく。ごんは、主観的にだが、もう「ひとりぼっち」ではない。ごんのひとりぼっちの不安定さが、いたずらを引き起こしたのだとするなら、ごんには、もう、いたずらの動機はない。そして、安定が生まれてくる。兵十のかげぼうしをふみふみ、という一方的なのだが、一体感をもつ、その関係の中の「ぶらぶら遊びに出かけました」であることは、容易に位置づく。

「いたずらは、さびしさからなんだな」「さびしいと、なんか人にしたくなるんだな」という真理は、四年生であっても、十分納得できることだろう。

（6）

兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。

この文で示されるごんの形象も、（4）（5）（6）と密接な関係をもっている。ほかの場面と同じように、一次読みの段階で必ず注目されているはずだ。ごんが、兵十のかげぼうしをふみふみついていった、という絵は、容易に再現することができる。明るい月がある、草むらでは虫が鳴いている、兵十と加助の大きな影が二人の歩みについていく、その後ろからごんが聞き耳たててついていく。ごんは、兵十のかげぼうしの中を歩いている。たいへん映像的だ。だが、それは、どんな意味をもっているのかについては、必ずしもわかるわけではない。ああそうか、かげぼうしをふみふみ行ったんだな、とだけ納得してすます子どももいるだろう。しかし、何人かは、必ずこの絵の意味を問題にしているはずで、そのとき、ほぼ正確な位置づけ、意味づけがおこなわれているだろう。ここでは、その一次読みの位置づけを手がかりにして、みんなで確認しなくてはならない。

ここでは、ほぼ（6）と同じ文脈を援用することになるだろう。直接的には、次のようである。

（5）「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」

23　ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

24　次の日には、ごんは、山でくりをどっさり拾って、それをかかえて、兵十のうちへ行きました。

25　「かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな疵までつけられたのか。」

26　次の日も、その次の日も、ごんは、くりを拾っては、兵十のうちへ持っていってやりました。その次の日には、くりばかりでなく、まつたけも二、三本持っていきました。

（6）月のいいばんでした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。

27　ごんは、「へえ、こいつはつまらないな」と思いました。「おれがくりやまつたけを持っていってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様お礼を言うんじゃあ、おれは引き合わないなあ。」

28　そのあくる日も、ごんは、くりを持って、兵十のうちへ出かけました。兵十は、物置でなわをなっていました。

右の（6）と27の間に、この場面が入る。兵十との共感が一体感となっていく。ごんは、ゆったりした安定の気分がある。（6）は、そのことを示している。27は、余裕を示している。28は27にかかわった行動で、これが、直接破局へ導かれることになるのだが、だから（7）は、ごんの示す兵十への一体感ととらえることができるし、（7）の行動は、兵十に対するひたむきなごんの心を強調し、読み手に訴えかける。

（7）

ごんは、ばたりとたおれました。兵十は、かけよってきました。　（8）

この場面は、裏口からこっそり入るごんを見た兵十は、ようしと、火縄銃をとって火薬をつめ、今、戸口を出ようとするごんをドンと撃つ。それに続く場面である。文脈の上で、ふつうなら、「かけよっていきました。」となるべきだろう。「かけよってきました」という近づき態は、ふつうののべ方ではない。このことについても、一次読みでふれられていないなら、ここだけ取り上げるのはむずかしい。一次読みの時、どこまで追求できたかは、この場合も、たいそう重要な条件になる。

「兵十はかけよってきました。」の、「きました」は、「今、戸口を出ようとするごんをドンとうちました。」という方向からではなく、「ごんは、ばたりとたおれました」の方向から描かれている。あきらかに、ごんの方への近づきをあらわす。その時の兵十は、「こないだうなぎをぬすみやがったあのごんぎつねが、またいたずらをしにきたな。」という決意の延長線上にあって、ごんが期待している、ごんへの理解からほど遠いのだが、それを「かけよってきました」とととらえるのには、ごんの気持ちのいじらしさに共感できなくてはいけないだろう。また、逆に、「かけよってきました」ととらえることによって、ごんの期待の深さを感情化することになる。

そして、事実、兵十は、心情的にもごんに「かけよってくる」ことになる。

29　家の中を見ると、土間にくりが固めておいてあるのが目につきました。

30　「おや。」兵十は、びっくりして、ごんに目を落としました。「ごん、おまえだったのか。いつもくりをくれたのは。」

この場合、かけよるという動きのすがたは、「くる」「いく」の両方をとることができるのだが、「くる」は、ごんの立場で、「いく」は、兵十の立場で用いられるだろう。29　30　ともに、兵十の動きだから、動きとしてではなく、「おまえだったのか。いつもくりをくれたのは。」という理解、心情としてのごんへの接近としてとらえられるだろう。兵十がかけよってきてくれる、わかってくれる、というごんの気持ちの表現がある。

一次読みよりも、いっそう深めることができるのは、（7）のところに引用した、ごんの気持ちの発展の中に、この「かけよってきました」を位置づけることができるという点だ。27　のごんのおどけた気持ちの表現には、ある自信さえ見られ、それが28に続く。そして、（8）の事態が起こり、「かけよってきました」となるのだ。

南吉の原稿（草稿）には、つづく文に、「ごんは、うれしくなりました。」とあったということだが、ここでは、

31　ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

という文が選択され、位置づけられている。31は、絶望的だが、理解しあうことのできた喜びも大きい。その理解への「かけよってきました」を、二次読みでは位置づけることができるだろう。

「ごん、おまえだったのか。いつもくりをくれたのは。」　（9）

兵十のごんに対する認識は、まとめてみると、ほとんど何もないことがわかる。あるのは、村人と同じようないたずらぎつねという先入観、風評と、

⑳　そのとたんに、兵十が、向こうから、「うわあ、ぬすとぎつねめ。」とどなりたてました。

という、ごんによるいたずらの直接の対象、被害者の意識だけだ。

ごんは、このうなぎ事件以来、急速に兵十に接近し、むしろ一体感とでも言えるような気持ちをもっていたのだが、兵十には何も伝わっていない。ただ、

32「おれあ、このごろとても不思議なことがあるんだ。」「何が。」「おかあが死んでからは、だれだかしらんが、おれに、くりやまつたけなんかを、毎日毎日くれるんだ。」

という、不思議な好意は、兵十の心を千慮している。その疑問は、解決をいつも要求するから、兵十は身近な人物一人一人に対して、この人かな、この人ではないかなと、思い続けてはいただろう。だが、その好意の主がごんであることには思い至らなかったとしても、不思議ではない。だから、ごんの姿を見ると、

④　そのとき、兵十は、ふと顔をあげました。　⑤　と、きつねが、うちの中へ入ったではありませんか。

⑥　こないだうなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをしにきたな。

⑦「ようし。」

⑧　兵十は立ちあがって、なやにかけてある火ひなわじゅうを取って、火薬をつめました。

②　そして足音をしのばせてちかよって、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。

という行動に出たとしても、なんの不思議もないのだ。兵十のごんに対する心理的な距離はこんなにもへだたっていたのだった。ところが、兵十がごんにかけよっていった（その時、兵十は、単なるいたずら退治か、獲物としか感じていなかったにちがいない。しめた、という気持ちだったろう。ごんは、「かけよってきました」と、その心理的距離がなくなっていくことを期待し、予感しているのだが）とき、

⑫　家の中を見ると、土間にくりが、固めて置いてあるのが目につきました。

⑬「おや」

と、兵十は、びっくりして、ごんに目を落しました。

という事態となる。兵十は、一瞬のうちに、その事態を読みとることができる。（9）の兵十のことばは、たずねる文だが、たずねているとは言えない。確かめたとも言えない。それは、まさに驚きであり、絶望のことばだ。ごんの好意に対して、そのごんに対する自分の好意に対して。そして、将来に対して。

一次読みでは、倒置の形などに注目して、兵十の切迫した気持ちを読みとったり、兵十が、土間のくりとごんとを即座に結びつけてとらえ、事態を把握したことの理解ができるし、場合によったら、兵十がごんに対して何の理解も持つことができなかった経過が提示されるかもしれない。そして、この（9）の文が、たずねているのではなく、おどろきを表している文であることについての指導ができるかもしれない。

二次読みでは、これまでに読みとった形象をもう一度整理し位置づける仕事をするが、それによって、（9）の文は、兵十のおどろきの大きさとして、再度確認されるだろう。

ごんは、ぐったりと目をつぶったままうなずきました。

（10）

兵十は、火なわじゅうを、ばたりととり落としました。

（11）

（10）は（8）の「かけよってきました」に直結したごんの動きと気持ちが描かれている。だから、（8）であげたすべての文をここに援用しなくてはならない。

ごんが「目をつぶったまま」うなずいた。そのようすが、「ぐったり」だった、ということなどについては、すでに詳細にとらえられているはずだ。だから、この段階で重要なのは、兵十が「かけよって」きた心理的な接近であり、相互理解に達しあえたことの確認である。（8）の項でのべたが、まさに「うれしくなりました」というのが直接的なことばだと言える。だが、それはいかにも一面的だ。ここには、死に直面するという、大きな悲しみもある。ごんは、その中で、こうにしかできなかったのだ。

「ごん、おまえだったのか。いつもくりをくれたのは。」という兵十のことばの内容は、たずねではなく、驚きであることを確かめた。ごんのうなずきは、たずねの形をした兵十のことばへの肯定のいしひょうじであるばかりではなく、「ごん」という兵十の呼びかけに対する応答の行動でもある。ここまできて、（9）を読みなおしてみると、たずねる文、がたずるはたきをしようとするとき、倒置の形をとったりしない。まして、それを切迫した事態であるとたずねる時、「言」と呼びかけたりしないことがわかる。兵十のことばは、ごんに対する理解と感謝、それに自分の好意に対する絶望的な後悔だ。ごんは、それにせいいっぱい応える。それが、（10）の文だ。

（11）で示されるのは、文（10）に対応する兵十の行動と気持ちだ。すでに、（9）で、兵十は事態をすべてとらえている。それは、確認すればするほど、絶望的だ。呆然と立ちつくす兵十の手から、火縄銃は離れていく。兵十は、火縄銃をたたきつける気力も、ごんんを手当てする気力もなく、ただ、体中の力が抜け、放心の状態になっていることが（11）によって示され、その必然性が文脈によって支えられている。

青いけむりが、まだ、つつ口から細く出ていました。

（12）

この一文は、ごんぎつねの全形象を表現しているものとして、しばしばとりあげられる。映像（絵）としては、兵十がばたりととり落とした火縄銃の筒口から、撃ったあとの煙が、細く上っていた。または、ただよっていた、という絵だ。この情景が、この作品の最後におかれていて、おおづめの役割を受けもっている。たいそう印象的である。一次読みでは、この絵を正確に描きあげる、という仕事を中心に展開されただろう。兵十は、ことの重大さに呆然と立ちつく

す。放心した兵十の手から、火縄銃がばたりと落ちる。ごんを撃ってしまったこの火縄銃は地面に転がって、その筒口から「まだ」「青い」けむりが「細く」出ている。

「まだ」は「青いけむりが、筒口から細く出ている」ことに対する書き手の気持ちをつけ加える。まだ、終わっていないのだ。だが、終わっていない、まだ続いているのは青いけむりだ。この青く細いけむりは、もうすぐ消えてしまう。そう、終わりなのだ。その気持ちがその絵から伝わってくる。「青いけむりは、ごんの命みたいな気がする」と子どもたちは言う。

二次読みは、おそらくその絵と気持ちを作品全体とかかわらせて位置づける、という仕事になる。「ごんの命みたい」から、ごんと兵十との関係をつきつめた絵みたい、とならなくてはならいはずだ。

ごんは、穴の中で「ちょっ、あんないたずら、しなけりゃよかった」と後悔し、「おれと同じひとりぼっちの兵十か」と、兵十の境遇に共感する。はじめ、うなぎのつぐないと思ってはじめた兵十への贈り物は、ごんの好意として、兵十への一体感と主観的にだが、確認するものとして強められていく。兵十がごんのことを理解してくれることを、ごんは疑わない。事実、二人の人物は、互いにわかりあえる時が来る。だが、兵十はごんのことをあまりにも知らなさすぎたのだ。その距離を一気に縮めたのは、ほかならぬ、火縄銃だ。兵十がドンと撃ち、ごんがばたりと倒れてから、「兵十はかけよってきました」なのだ。そして、その段階で、はじめてすべてがわかる。ごんを撃った兵十の火縄銃は、ばたりととりおとされ、地面にころがっている。青いけむりが「まだ」つつ口から「細く」出ている。「青い」「細い」けむりは、たよりないが、まだつつ口から出ている。だが、もう終わるだろう、と予感させる。それは、いかにも悲劇的である。青いけむりは、まるで、ごんと兵十との心のふれあいを象徴しているみたいだ。

二次読みは、「読み」であって、「理解（分析）」ではない。場面場面の形象がどう位置づいて、さらに大きな形象をつくっていくか、を中心にしながら、やはり、映像化・感情化の仕事を受けもつ。このおおづめの場面もそうだ。論理の援用も必要だが、あくまで、絵と気持ちを大切にしたい。そういう立場でいうと、ここに書いたことは、記述として、たいそう不十分なものだ。

記述的に不十分であるが、この絵は、とても印象的に子どもたちにとらえられている。その印象の強さ、位置づけの的確さが、深い読みを可能にするにちがいない。

> いいお天気で、遠く向こうには、お城の屋根がわらが光っています。墓地には、ひがん花が赤いきれのようにさき続いていました。（13）
>
> 人々が通ったあとには、ひがん花がふみ折られていました。（14）

「青いけむり」というおおづめのところまで読み進めたあとで、「おこり」に位置づけられたこの場面を取り上げるのは、順序として不適切かもしれない。もともと、二次読みは、くりかえし読み二次ととらえられてきたから、一次読みで読み残したところ、うまく絵と気持ちにならない場面を、一回通りていねいに読み通した、という全体的な感覚をもって、もう一度、くり返して読むという仕事だ。それは、必然的な関係づけの仕事になる。教室の教師と児童との実状では、はじめからくりかえし二次という形でおこなわれてもいいし、もっともわからなかった場面から、相互のつながりを求めて展開されてもかまわない、と考えられる。ここでは、順に従って、十あまりの場面を、その立場で取りあげてきた。

そして、青いけむりの場面では、どうしても象徴性についてふれられなくてはならなくなった。もし、青いけむりの象徴性がとらえられたなら、作品全体にちりばめられている象徴的な場面も、象徴として位置づくはずだ。その立場でみると、（13）（14）は、あざやかな絵としてだけでなく、おこりの部分に位置づけられた象徴として、子どもたちに形象的に位置づくと思われる。

文（13）は、ひとつの美しい絵だ、と、まずとらえられる。そしてつぎに、「と、村の方から、カーン、カーンとかねが鳴ってきました。」との関係、特に「と、」の位置づけから、ただ美しい絵であるだけでなく、それに見とれているごんの姿が合わせてとらえられる。ここまでが、一次読みだった。もし、「と」がうまくとらえられなかったら、二次読みで補強する必要があるかもしれない。そんなふうにだいじな絵だった。

だが、読み手とすると、この異常なまでに美しい情景描写は、それだけでかたづかない。何かを心に残す。残したまま、解決されないまま、次の場面へうつっていく。そして、青いけむりで、その象徴性の方向づけを与えられると、その立場を、この場面に適用してみたくなってしまう。

判じ絵のような、またはこじつけになるような授業はさけなくてはならない。（13）には、おだやかな天気、やわら

かな陽光、そして、もえるようなひがん花の赤。（14）には、もえ上がるようだった赤い彼岸花がｆみおられる無残。それが、ここには提示されている。青いけむりのはかなさがとらえられると、燃え上がる赤、そして、踏み折られる無残さは、「おこり」に位置づけられた暗示的な、象徴的な場面としてとらえられる必然性をもってくるにちがいない。子どもたちは、わずかなヒントで、この場面をとりあげることができる。

さらにさかのぼって調べさせると

③　空はからっと晴れていて・・・・・

④　辺りのすすきのほには・・・・・・

などの、いかにも鮮やかな風景描写は、ここで取りあげた（13）（14）と同じように、まず、状況を描く。次に、ごんの姿を描く。という、二つの重なった表現をもつのだが、同時に、物語全体の象徴として、または、暗示としての役割をもっているようにとらえることができる。「〈自然の形象〉は、人間の生活、事件が進行する背景をなしていて、性格と状況との描写を助けるばかりでなく、作品のもつ情緒的なひびきをつよめる。（奥田靖雄）前出」

大切なのは、「情緒的なひびきをつよめる」ということだ。もし、この項で述べたことが、単なる連想ゲームに終わったり、つじつま合わせになったり、理屈になったり、てらいになったりするなら、また、そういう見通ししかたたないなら、このことはとりあげてはならない。